

Ken Kesey : *One Flew Over the Cuckoos' Nest*

が転換期のアメリカにおいて意味するもの

植村泰三

戦後のアメリカ文学作品の中で、とりわけ50年代から60年代の作品の中で、若者の心をとらえたものに2つの作品がある。その1つは若者のバイブルとまで言われたサリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』(1951)であり、他の1つが本稿でこれから扱おうとする『郭公の巣の上で』(1962)である。前者のサリンジャーの作品は50年代の初期に書かれたものであるが、この作品の中で彼は60年代に到来することになる対抗文化(counter culture)について予見しており、その当時の若者のみならず今日の若者もが抱えている問題の1つである「自我同一性の拡散状態」⁽¹⁾について扱っており、アメリカの若者の文化の本質についての興味深い共通項目を示唆している。さて、他の1つである『郭公の巣の上で』は、原題を *One Flew Over the Cuckoo's Nest* といい、ケン・キージーの処女作であるが、その当時の若者の心をまたたく間に捉えてしまったのであった。この作品はジャック・ニコルソン主演により映画化されたが、アメリカのみならず日本においても大変な好評を博したことは記憶に新しいことであると思う。日本においては70年代に上演されたが、当時大学生であった筆者も共感を覚え何度も見に行ったものである。

この作品の中でキージーは主に3つの問題を提起している。その1番目の問題は、50年代のアメリカ社会の特徴であった「沈黙の世代」に対する対抗である。その当時のアメリカは対外的には朝鮮戦争に続く米ソの二極構造による冷戦の時代であり、国内的には「豊かな社会」を実現したもののマッカーシズムが吹き荒れ、人々は「法と秩序」を求め「赤」と呼ばれることを極度に恐れ沈黙を守ったのであった。思想史的にも反

主知主義的傾向が支配的になり、この当時より多くの若者が大学に進学するようになったが、彼らはよい成績を取りよい職と地位を獲得することを至上の目的とし、順応者として生きていたのであった。社会学者のデイヴィッド・リースマンは『孤独な群衆』の中で、多くのアメリカ人は内部志向型より外部志向型に転化したことを指摘しているが、⁽²⁾このリースマンの指摘は50年代の沈黙を守りきわめて現実的なアメリカ人の特徴をよく表わしている。

さてこの沈黙を破ろうと登場するヒーローが、主人公のランドルフ・P・マックマーフィーである。この小説の舞台はビッグナースと呼ばれる看護婦長がすべてを管理している精神病院であり、この病院内ではすべての患者が婦長の指揮の下、規律と秩序を守り、彼らの多くは不満と矛盾を感じてはいるものの、ひたすら沈黙を守っている。このような状況下の病院にキージーは赤毛の反逆者マック・マーフィーを送り込むのである。彼がいかにか型破りの自由人であり、今後どのようなストーリーが展開していくかが、彼の登場場面でみごとに示唆されているのである。

This new redheaded Admission, McMurphy, knows right away he's a Chronic. After he checks the day room over a minute, he sees he's meant for the Acuteside, and goes right for it, grinning and shaking hands with everybody he comes to. At first, I see that he's making everybody over there feel uneasy, with all his kidding and joking and with the brassy way he hollers at that black boy who's still after him with a thermometer, and especially with that big wide-open laugh of his.⁽³⁾

この部分で我々は彼がこの病院内のすべての患者達とは明らかに異質な人間であり、それは彼が本来のアメリカ人が求めてきた「自由人」でありそれ故自己の感情・意思を表明する人間であるためであることがわかるのである。この時点でマック・マーフィーの挑戦が開始されるので

ある。そして以下の部分で、婦長（組織の管理者）対マック・マーフィー（組織への挑戦者）という図式が明らかになるのである。

“Aide Williams tells me, Mr. McMurphy, that you’ve been somewhat difficult about your admission shower. Is it true? Please understand, I appreciate the way you’ve taken it upon yourself to orient with the other patients on the ward, but everything in its own good time, Mr. McMurphy. . . everyone must obey the rules. “Ya know, ma’am,” he says, “ya know—that is the exact thing somebody always tells me about the rules. . .” He grins. They both smile back and forth at each other, sizing each other up.⁽⁴⁾

またアイゼンハワーに対するユーモラスな皮肉をキージーは述べている。これは病室におけるボスが、ハーディングかマック・マーフィーのどちらがなるかを定める時のことである。彼等2人は精神病院内でどちらがより狂っているかを論戦している。

“Mr. Bibbit, you might warn this Mr. Harding that I’m so crazy I admit to voting for Eisenhower” “Bibbit! You tell Mr. McMurphy I’m so crazy I voted for Eisenhower twice!”

“And you tell Mr. Harding right back”——he puts both his hands on the table and leans down, his voice getting low——“that I’m so crazy I plan to vote for Eisenhower again this November”⁽⁵⁾

これから後マック・マーフィーはこの病室内のボスとなるのであるが、同じ病室内の今まで沈黙を守ってきた順応者たちに、自分自身の意見を表明するようにさせるのである。そしてこの彼の運動と変革はワールド・シリーズの観戦でピークに達するのである。この病室内でのテレビの時間帯は婦長たちによって上から決められていたのだが、その規則の

「変更」を病室内の患者自身の「投票」によって行なうのである。この投票による変更はアメリカの本来の民主主義の原点でもある行為なのである。こういったマック・マーフィーの反逆と変革を我々は固唾を飲んで見守ることになるのである。このように法と秩序が支配し、沈黙を守る順応者だけが生きのびることのできるアメリカ社会に、キージーは投石をするのであるが、実はこれが60年代のアメリカに吹き荒れる対抗文化の布石ともなっていくのである。

蓋し、アメリカでは10年間が‘decade’という1つの単語として成り立っているほど、単位として定着している。アメリカ人は10年単位でものを考えることを、歴史的・文化的単位として受け入れている故、アメリカ文学もその例外ではないようである。

Malcolm Cowley, in his memoir *And I Worked at the Writer's Trade*, discusses the processes whereby literary the generations succeeded one another and proposes a systolic/ diastolic or contractive/ expansive model. Thus in American literature the Fifties can be seen as an archetypal systolic period, characterized by the carefully composed dreams of alienation and despair of such writers as Salinger, McCullers and the early Updike and Malamud and the restrictive emphasis on form of the reigning New Critics. Reacting against this privatization and formalization of literature, characteristic writers of the diastolic Sixties-Kesey, Mailer, Pynchon, Vonnegut, Barth, Heller, Barthelme and others-achieved dazzling end-runs around the strictures of psychological realism to open up the forms of the novel, short story and memoir.⁽⁶⁾

カウリーも上記のように指摘している様に10年という視座に立脚したばあい、Keseyのこの作品が50年代の収縮期に反発し60年代の拡大期に

入っていることがわかる。60年代はあらゆる意味で拡大期にあたり、転換期のアメリカ⁽⁷⁾にふさわしい年であり、沈黙から自己表明への転換期であったと言い得るであろう。

さて、キージーの提示する第2番目の問題は「女権」の問題である。前述のように50年代から60年代にかけて、アメリカは1つの転換期を迎えることになるが、女性解放運動が公民権運動と平行して本格的展開を見せはじめのもやはり60年代のことである。女性が‘Affirmative Action’の適用者であるという消極的な考え方から一歩進んで、伝統的な「女性の場は家庭にあり」という像をこわして、全面的な解放が唱えられはじめた。これは60年代に入ると従来の工業化社会の終焉がそろそろ始まり、理念上の女性像と現実の女性とのギャップが経済学的側面からあらわれ始めるのである。また女性の本格的な社会参加、職場進出も始まる。キージーのこの作品の発表後のちょうど1年後には、ベティー・フリーダンの『フェミニン・ミスティーク』⁽⁸⁾が出版され、60年代後半には全国的に女性解放運動が本格的展開を見せ始めるに至る。女性解放運動もやはり対抗文化の1つの現象であろうが、注目すべきことはキージーが管理社会及び父系性社会であるアメリカ社会との関係で女権支配による「歪み」を捉えていることである。本来原則社会であり父系性社会であるアメリカ社会においては、女権が導入される際にはある種の歪みを生ずるものである。このことは本来例外社会であり母系性社会である日本社会と比較してみると明確になる。例えば「母親中心主義」は日本社会においては「母源病」あるいは「甘えの構造」⁽⁹⁾としてエディプス葛藤とともに小規模なものとしてあるいは個人のレベルで解決されることもあり得るが、アメリカ社会においては同性愛、離婚の多発といったように社会病理的レベルに移行することが多いようである。そもそも日本社会とアメリカ社会は上記のメルクマールで考えれば対角線上にある。

キージーは婦長のことを「玉切り」と呼ばせこの小説特有のグロテス

クな幻想を駆使することによって彼女を強大な処し難いものに描いている。婦長のみならずハーディングやラックリーの妻も彼等を威圧しているのである。この小説の婦長は完全に自立した職場に身を置いている女性である。60年代後半に組織的女性解放運動により生ずる「女権」の問題を、さらにこの女権が引き起こすことになるアメリカの社会病理を、キージーは暗示しているように思われる。

そして第3番目の問題が、この小説中の「コンバイン」によって示される管理社会の問題である。また管理社会におけるヒーローの型、精神医学のあり方も示唆されている。病院によって表されているコンバインはまさにジョージ・オーウェルのいう *Nineteen Eighty-Four* の社会なのであろうが、キージーは語り手のプロムデンを狂人に設定することによって幻想小説の形式をとりいっそうグロテスクなものにしており、管理社会の恐怖をより効果的に我々にうたてている。(10)

この小説のヒーローである主人公のマック・マーフィーこそ「アメリカの正義」であり「アメリカの良心」ではなかったろうか。これはかつて、ノーマン・メイラーが『裸者と死者』(1948)においてハーン少尉やレッド・ヴァルソンに託したのと同じように思われる。ハーンが陰謀により殺され、レッドが挫折し順応者として生きる道を取ったように、マック・マーフィーもロボットミーによって廃人にされてしまうのを知り、我々はいかに反逆をしようとも順応者にならなければ組織の生けにえにされてしまうことを痛感するのである。マック・マーフィーが順応者として生きることを拒否し、自由人として生きる姿に我々は拍手を送ると同時に自らの夢を託するのである。しかしマック・マーフィー亡き後、プロムデンをカナダに逃走させることによってキージーは新たな夢を託そうとする。マック・マーフィーの反逆をハーンの反抗と同様「徒労」に描いているところはキージーもメイラーと同じであるが、プロムデンに新たな夢を託し、新たなヒーローを最後に創造したところに両者の差があるよ

うに思われる。ここに60年代の夢と新しいタイプのヒーローが生まれるのである。ブロムデンはある意味では、「演技」という技術によって生き延びた新しいタイプのヒーローなのである。(11)

この作品中でロボットミ手術を施行する婦長と外科医の癒着は、ミルズのいう「軍産複合体」を想起させるが、小説の舞台を精神病院にキージーがしたことは小説上の効果をあげるのみならず精神医学史においても興味深いことである。これは彼が学生時代、アルバイトとして勤務した精神病院での体験が大いに生かされている。60年代の対抗文化の思想は精神医学界にも多大な影響を及ぼしている。この小説の精神病院内で行なわれている電気ショック療法 (electroshock therapy) やロボットミー (prefrontal lobotomy) は60年代後半になると薬物療法 (pharmacotherapy) に移行していくが、これは前2者が保安主義的思想に立脚しているのに対し、後者が治療主義的思想に立脚しているため、対抗文化や学生運動の余波が精神医学会にも影響をおよぼし、この流れを形成する1つの要因にもなっている。この傾向は60年代のアメリカ精神医学会において、精神病に対し力動的解釈がなされ始めたことと大いに関係がある。この時期のアメリカ精神医学会においては、社会精神医学 (social psychiatry) がさかんになり、前述のように力動的解釈がなされ始める。すなわち従来においては完全なる精神病領域に入るとされた症例も、一応括弧に入れながら考え、文化的社会的側面からアプローチしようとするものである。この姿勢は大いに対抗文化と関係がある。何故ならば、60年代のアメリカはこれにより価値が多元化してゆき、価値転換が容易になり60年代初期であったならば精神病と決めつけられていたケースも、柔軟な解釈が加えられるようになったからである。これはかつてピネルがサル・ペトリエールで、精神病者を鎖から解放した以来の柔軟な解釈であると言っても過言ではあるまい。(12) キージーの舞台となる精神病院は、エリスという患者が手錠でつながれ、ロボットミーや電気ショックが盛

んに行なわれる黎明期の病院であり、この小説をいっそう効果的にしているのかもしれない。

キージーのこの作品は転換期のアメリカにふさわしい問題を内包すると同時に、その後のアメリカ社会の方向性を示唆するものでもあるまさにアメリカ現代小説の傑作の1つなのである。

- (1) E. H. Erikson, *Identity and the Life Cycle* (International University Press, 1959) (小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房, 1973) このエリクソンの提唱は60年代の若者の文化構造を知る基底ともなり得るほどであり、アメリカの精神医学の「力動性」の1つの特徴でもある。後述のようにアメリカ精神医学の「力動的解釈」は60年代の対抗文化を理解する鍵にもなる。
- (2) 齊藤真『アメリカ現代史』(東京大学出版会, 1976), P. 262.
- (3) Ken Kesey, *One Flew Over the Cuckoo's Nest* (Penguin Books, 1962), P. 17.
- (4) *ibid.* P. 24.
- (5) *ibid.* P. 20.
- (6) Gerald Howard, *The Sixties* (Washington Square Press, 1982), PP. 5-6.
- (7) 'America in Transition' 「転換期のアメリカ」というタイトルでNHKの大学講座で1974年10月から1975年3月まで放送された。アメリカの有識者の論文を集めたもので有益なものである。この講座も50年代との対比で60年代を扱っている。
- (8) Betty Friedan, *The Feminine Mystique 1963*
- (9) 土居健郎, 『「甘え」の構造』(弘文堂, 1968) 日本社会を比較文化の視点をもってメスを入れた不朽の名著である。
- (10) 岩元巖, 『現代のアメリカ小説』(英潮社, 1974), P. 211.

- (11) Ihab Hassan, *Radical Innocence* (Princeton University Press, 1961)

ハッサンはヒーローを3つのタイプすなわちファルマコス（反逆的犠牲者）、エイローン（自己卑下する者）そしてアラゾーン（悪漢または自由奔放な反逆者）に分類しているが、マック・マーフィーはファルマコスに属するが、ブロムデンはややエイローンに属するやはり新しいタイプである。

- (12) 西丸四方, 『精神医学入門』(南山堂, 1978), P.252.